

北越屋譜初編卷之中

目錄

雪類ゆきるい 小災こわざ 次第下ついでげ

五山ごさん 雪の圖ゆきのず

縮ちぢの種類しゅるい

綾あや綸りん

織婦おりのむすめの發はつ狂きやう

御機屋おんきやの靈たま威い

羽はふら

菱山ひしやまの奇ま事こと

狐きつね火か

雁かりの代見しろみ立たて

寺てらの雪類ゆきるい

越後えちご縮ちぢ

縮ちぢの紵と並なみ紵と績なり

織婦おりのむすめ

御機屋おんきや

縮ちぢを雨あめも並なみ縮ちぢの市いち

雪中ゆきなか花水はなみづ祝いわいひ

秋山あきやまの古風こふう

狐きつねを挿さる

天あまの細こ

雁の總立

通計二十四條

法海川の勢り

北越雪譜初編卷之中

越後塩澤 鈴木牧之 編撰
江戸 京山人百樹 刑定

○雪類人小災也

吾任魚沼郡の内也雪類の爲小非命の死をうける事其村の人のまをりて
て小記をあるも人の不祥なる人なを詳ふせば○て小何村との取家
肉の上下十人あまりの農人あり主人は五十歳をより毒は四十かまは世患は二
十あまり娘は十八と十五とつとも養子の潮ありけり一年二月の末トり主
人の朝より用ゆる取出行一其日まは小申の頃まじり飯りまじりばまの潮を
とるへ用ゆるあふつりけり家内不審ありは作家横をらして其家より
父が事をたがね一取らしていさかひとらふていさかひとらふていさかひとら
せりりて尋求一とて娘が身首をたがねとらふていさかひとらふていさかひとら

昔はさういふ村からいへて難をかりあつて雪類の上ふたより餌をのみつ
 かの知りあもまはけいの一羽の難羽のきく時々のふふ為最けき餘のふふり
 小あつまりて産をのみせけいへ水中の死骸をのみむ術のきを雪を用ひへ
 愛のオレこのちりまはまへんりひのり老人衆ふむひあふふふ下ふ在
 へしと掘りあつて大勢一度ふさかりて雪類を碎きまごへ掘りあつて大
 穴をうへて六七八のりへ入るへり目ふふふのちりなる一掘りあつて大
 けいふ真白の雪のふふ血を流る雪ふりのあまきりやと種りの入るへ片
 腕ちきまへ首の死骸をのりへ一ち腕のりへまはま首のりへふふと
 廣へ穴あきまるとまはまらむのりへまはま首のりへ雪の中ありの
 ちあ面はまのりへへりまのりへふふのりへ妻の子らとまをるよりの妻ハ夫が
 首を抱へ子ごの死骸ふとのまはまのりへまはま首のりへ入るへこのあひまをるへ袖
 をのりへまはまのりへけいへまはまのりへまはま首のりへ着る羽織ハ夫の首をへりへ

かく世息ハ布子を脱て父の死骸ハ腕をまへり涙をふふつて養育人へまはま時々の
 せん走りたる者ども戸板むらりまと掘りて用意をまへりまはま首のりへ首をま
 むまはまのりへかへげまはまへんり前後かへまはまのりへまはま首のりへ飯り
 けいへまはまのりへ牧之が若のりへ時々の事あまづりりる人のかへりへまはまを
 せりへまはまのりへ命をうへりへ人捕多のりへまはまの家をまへり
 へまはまのりへまはまのりへ其神をりへりへまはまのりへ死骸の頭ハ腕の断難へりへ
 へまはまのりへ断難へりへ

○寺の雪類

ろまはま敢て山あまのりへりへ形状峯をるへりへ然ハ時とへるまはまのりへ文化の
 へりへり思川村天昌寺の任職執中和尚ハ牧之ガ伯父ハ神冬のをまはま人居間の二階
 ろへり書架ふよりへ物を書くをへりへ窓の庇下りへる垂氷の五六尺あるが明りふ
 障りて机のやりの暗まはま家の障りて家僕が雪をまへりへりへりへる木鋤を

ころかのつらさを打きこんで一打うちけるおびききやめりけん
 本堂不積る雪の片屋根石くとも重く土蔵のやうい清水がりの池あり
 お和尚さまもお押添を池へ入らざるをこの勢いお身ハ手鞠のごとく池をま
 もとて掘揚る雪お半身を埋りしものまげびるるお庫裏の雪をわり
 ぬるあつら馳まうり持る木鋤りく和尚を掘りけまら和尚大笑い身うち
 をんふ聊も疲うけむ耳お掛る目鏡まうらう不思議の命をまうりひね
 此時七十余の老僧一前ふら何村の人の不幸お比る万死お一生をえん
 天幸とらひつる一説も八十余も元病お一く文政のまも遷化せよ平日余
 示してらま一我雪類お撞と一筆を抹りて居り一尊き佛經の
 ゆゑたもやハ一字毎お念佛中て書居りあつら雪類お死まうり一を不思議
 お命助り一一字念佛の功德もやあひけんまうら入ら常お神佛を信
 悪事災難を免るるをいの一神佛を信るの中より悪心いらぬもの

悪心の元々災難をのりて萬一とをくへらま今も猶耳お残り人智を尽して
 のりて大難おあひ因果のまも知らんま入らまうりあつら
 人家の雪類も家を潰せ一軍人の死るるをい見聞まうらまのい
 とてまうら

○玉山翁の雪の圖

さだのと一玉山翁が梓行せよ一軍物語の通本の中お越後の雪中おた
 うひ一と一圖あり文お深雪おのくまも十二月のやうおあつら軍兵
 ともが奉止をえら雪お浅く見ゆ
 越後の雪中馬足ハつら一ゆあお人お雪中
 牛馬を用ひせらや軍馬をえら馬上の鞍お
 雪おた国の人のお作ら雪の寒地まも越後雪中の真景お甚一
 くのまうら一雪お庫裏のまも一ゆあおのまうら
 づいお玉山のまも種おんま昔おまうら書圖のまもかまうら
 筆お雪の真景種お寫一横帯おるま真景もまうら春の半お一三圖

嶺ふらうた法師續のふらうた在る温泉ふ旅りそのあつりの雪を見つゝあつた
 峯よりあつらふらうたの雪のふらうた五七間やらの白南或は三角の雪の長さ三十三
 間もあつたといふふらうたの雪のふらうたの雪のふらうたの雪のふらうたの雪のふらうた
 雪国がらうたの雪のふらうたの雪のふらうたの雪のふらうたの雪のふらうたの雪のふらうた
 ふうりうらうたの雪のふらうたの雪のふらうたの雪のふらうたの雪のふらうたの雪のふらうた
 雪のふらうたの雪のふらうたの雪のふらうたの雪のふらうたの雪のふらうたの雪のふらうた
 例の繪本とらうたの雪のふらうたの雪のふらうたの雪のふらうたの雪のふらうたの雪のふらうた
 存りとりらうたの雪のふらうたの雪のふらうたの雪のふらうたの雪のふらうたの雪のふらうた
 小玉山を沈へ惜しむ

○越後縮

縮は越後の名産ふらうたの雪のふらうたの雪のふらうたの雪のふらうたの雪のふらうたの雪のふらうた
 かのふらうたの雪のふらうたの雪のふらうたの雪のふらうたの雪のふらうたの雪のふらうた

僅ゆらうたの雪のふらうたの雪のふらうたの雪のふらうたの雪のふらうたの雪のふらうたの雪のふらうた
 此国ふらうたの雪のふらうたの雪のふらうたの雪のふらうたの雪のふらうたの雪のふらうたの雪のふらうた
 たりゆらうたの雪のふらうたの雪のふらうたの雪のふらうたの雪のふらうたの雪のふらうたの雪のふらうた
 鑑を築ふらうたの雪のふらうたの雪のふらうたの雪のふらうたの雪のふらうたの雪のふらうたの雪のふらうた
 小越布千端とあり縮すたの雪のふらうたの雪のふらうたの雪のふらうたの雪のふらうたの雪のふらうた
 町殿の雪のふらうたの雪のふらうたの雪のふらうたの雪のふらうたの雪のふらうたの雪のふらうたの雪のふらうた
 と見えゆらうたの雪のふらうたの雪のふらうたの雪のふらうたの雪のふらうたの雪のふらうたの雪のふらうた
 くの越後布ハ布の上品物なりを後と次美小工を添て糸小縫をつよ
 くかけて汗を凌ぐ為小綿を織るゆらうたの雪のふらうたの雪のふらうたの雪のふらうたの雪のふらうた
 くの雪のふらうたの雪のふらうたの雪のふらうたの雪のふらうたの雪のふらうたの雪のふらうたの雪のふらうた
 ちゆらうたの雪のふらうたの雪のふらうたの雪のふらうたの雪のふらうたの雪のふらうたの雪のふらうた
 の模様を織るゆらうたの雪のふらうたの雪のふらうたの雪のふらうたの雪のふらうたの雪のふらうたの雪のふらうた

様をもり縞も飛白も甚上手なる種々の奇工を以て織機婦人
よりの伶俐なりける故なり

○縮の種類

魚沼郡の内由緒縮を以ては華一様なる村ありて出せ給ふは
自らむりよりの其品小のと大練と他の品小移らざるゆゑ其要との品を
産を専左のごとく

▲白縮ハ堀の内町在の村又津佐組小出鳩組の村

▲模様もの或ハ飛白りもの藍縷ものハ塩澤組の村

▲藍縷ハ六日町組の村 ▲紅桔梗縞のものハ小千谷組の村

▲浅黄縷のものハ十日町組の村又紺の平度縷ハ高柳師ふかきり右

の魚沼二郡の村ハ此餘は出せ給ふ所二三ハ村の事ハ此の事ハ

まじり合へば縮ハ右村里の婦女らハ雪中ハ篋り居る漁の手業ハ

おのてい末年賣出の事ハ十月より糸を以てて次の年二月
のうづら晒しを以て白縮ハうちなる所ハかりやまなやうの事ハ人ハ文のものや
ぬいものいものも手練ハよくあるものハ村の婦女らハ丹精を尽
をり多々ハ小冊ハ冬一ツ一其のまを下し記せり

○紵

縮小用ハ行ハ奥ハ會津出羽最上の産を用ふ白縮ハのりハ會津を用ふ
あしづつ影紵とらふもの極品ハ米澤の撰紵と称せしも上品ハ越後の
紵商人ハの国ハふりて紵を以てりて國ハ賣出紵を此國也もそりハ
古言ハ麻を古言ハとらひハ綜麻のるぬハ麻も紵も字美ハハ布ハ
織る料の糸を以て紵を以て作ら俗也と字書ハ云ふなり

○紵績

余一年江戸ハ旅宿せり頃或人ハハ縮小用ハ紵績を績むハ其の婦

人誘ひありて一家のみありてその家ゆく用ふる針を績は世人とならむゆゑの
家をめぐりて績と聞かざらばゆゑにひきひきと人ぞかゝる空言をばひひとけん
さりのまゝ魚沼一郡も廣きやゆゑ右やういふも知らぬ人なりといひのりともふ
下品のちぎる用ふる針のりやういふ下品の縮のりも姑合て論ぜば中品以上用
ふるを績ゆらむ所の座をさきあらむ體を正しくり呼吸のりもて手を動せ
て為作をるも定座小居るば假小居て其為作をるまのづゝ心鏡を
糸小太細りきて用ふならぐり常並の人の針を績ぬ唾液を用ふるも
ちぎるの績ゆら茶碗やうの物小水をさくひひてこまをのり事毎小鹽の座を
清めてこまをのりまのり

○綾綸

糸小作る糸も座を定め体を圍位する績小かゝる綾綸その道具その手術
その次第の順その名小呼物許多種あり繁細の事を詳ふせんはてし

けま言をてまゝいふもよりのりもるまのりの手作まゝ雪中小在
上品小用ふる処の毛よりも細き糸を終兆舒疾してありやう雪中小蓄り居る
天然の濕氣を得まゝ為難一濕氣を失はば糸折るまのりをととと
かよより断るまあり是故上品の糸をあらう所ハ強き火氣を近付む時
より織る後二月の半小のり暖氣を得て雲中の濕氣薄き時ハ大なる針やう
の物小雪を盛て機の前小置ての濕氣をかりて織るまありてまのりのり小付
て熱思小績を織る糸の糸ハ陽熱を好布を織る糸ハ陰冷を好む
まゝ績ハ寒小用ひて温まゝ布ハ暑小用ひて冷まゝ是ハ天然小陰陽の
氣運小屬する所ありん件の如く雲中小糸とや雪中小織り雪水小洒き
雪上小晒を雪ありて縮めりて越後縮ハ雪と人と氣力相半して名産の
名あり魚沼郡の雪ハ縮の親と云へ蓋し薄雪の地小布の名産あるは
ハ糸の作り小よるも越後縮小比つゝ加る

御機之雲風織女誘狂の圖



妻の男

御機之雲

手をかきど丹精の日敷を歴て足さふ織ちりしるをさしりやより母持きり
しときと娘はやく見てく物をちりけりしるをさしりやより母持きり
女どる煤のりの暈あるをさし母さぬのちせんりやより縮を頼ふあて
哭倒しけるごとより非致狂とありさあぐの浪言をのちのて家内を狂ひさる
をさしり西親娘が丹精しる心の内をさしひきて哭ひるたけり見る人もあはまの
てさる袖をぬりしけるごと友入るあがりまののさしり

○御機屋

貴重専用の縮をわさる家の辺りかつりしる雪をさしり心へ極まて住居
の内中さるしけ畑のひらぬ明りもさしり一間をさしり清めあさるしき遊を
あはさるし四方小注連をひきりしりその中央小機を建る是を御機屋と唱へ
て神の在りごとく衆尊ひ織人の外他人を入さしり織女ハ別火を食し御機
ふかす時ハ衣服をあさるし塩垢離をとり鹽激さしり身を清む日毎

ふかくのごとく紅潮をらむるハ勿論之他の娘らると今日誰との御機屋
を拜ふまのるさるさるふらりて至極上手の女ふあさるし此をさしりやを建る
わけさる他の婦女ららるごとを羨るし比喩ハ階下ふありの昇殿の位をさしり
かじり

○御機屋の靈威

神ハ敬ふふよりて威をさしり置る威りさるの物もさしりて教い信
むさる靈威のさる空しり人の子をさしりさる草鞋さる衆人の信せしり
てのさるハ草鞋天王とて祭りし事五難組ふらりさるしりや神くさ
を教い靈威ある冥々の天道ハ人の知を以てさるしあさるしびらさる村の娘
例の御さるさふありの心を澄しあさるをさしりさるしりさるの意をさ
くし音さるののの心みさるしあがらさるしりさるしりさるしりさるしり
心を通す男しりさるしり人目の関さるしりさるしりさるしりさるしり



雪の中
晒編圖
世を
雪の中

雪の中

病家の
愛母の
泣く

十四

雪中山花水祝い

○雪中花水祝い

魚沼郡の内宇賀地の神城の内の鎮守宇賀地の神社に本社八幡宮之上より立せりといふ縁起文多しといふ省く靈驗ありといふ事ハ昔々世々あり
 処の神主官氏の家小貞和文明の頃の記録今小存せり當主ハ文雅を好吟詠ゆゑ富り雅名を正樹といふ余も同好を以て交を修し幣下と唱ふ社家も請方ふの事あり大社に此神の氏子城の内ゆゑ祭をむく又ハ塔をくりし
 中も神勅とて誓ふ水を賜ふ事を花水祝ひといふ毎年正月十五日の神主人
 新婚ありて家毎小神使をのりてかま門かき時ハ早朝よりて黄昏ふりて
 時もあり友人嘿斎翁曰^{堀の内の人}花水祝ひといふ事ハ淡路宮瑞井の井中
 多邊花の落る様ありといふの日本紀ふええといふ遺傳といふ花水の号といふ
 起立ゆゑといふ事ハ新嘗の誓ふ神水を汲りて當社の神祀とて

當日新嘗ありて家小神使より言人ハ百姓の内田家門地の輩神使を務め
 家定ありてその中ゆく服忌といふ事ある者家内小病人ありて縁類小不祥
 ありての皆除くといふ事ある家内小故障あり平安無事なる者を撰び神使の前
 の朝神主沐浴存戒一存服をつけり本社小昇りといふ事ある人の名を考
 て御園小の神使小任て神使といふ神使小當りて人潔斎して投を勤む
 を大夫といふ^{噺奇翁曰}神人といふ大夫といふ怪言の事^{正月}神使本社を出るその行
 装ハ先狭箱二本道具堂笠立傘弓二張雜刀神使侍烏帽子素襖次小太
 刀持長柄持傘さかか供侍二人草履取跡鎗一本^{正月の神使小次小氏}
 子の人々大勢麻上下ゆて隨ふから行装ゆて新嘗の家小のりてあまその以
 前雪中の道を作り雪ゆて内よりの中より所ハ雪を石壇の中よりつくり或も
 雪ゆく杖をもちて処を作りて見物のなりといふ事ありてその人夫を
 雪ゆく杖をもちてその家小のりて家内をゆく一清も其日正殿の間に

一間ハ塩垢離しほごりふきよめてを神使かみの席まト一縁建えんたてを布ぬいり上座かみざハ毛氈けりたんを敷ひ上
段かみの間まハ表うらり刀掛やぶかをむく次の間まハ親族しんぞくハきこまて一き入きいりより祝美いわみのちり物
をさるふかく場ば臺たいをふ賀味がみをさるふささのひまぐと門かどハ幕まくらをさるふたは
の処ところをさりあげてさるふ皆脱みなだの壇だんをたて去い開ひら式しき臺たいハ准のりふ家内けい内のものりつと衣い服ふく
をさるふ神使かみをさるふ神使かみのさるふりさるふ親おやののハ親子おやこ麻あし上下かみゆく地上かみ出でて
神使かみをさるふ神使かみのさるふりさるふ改かへ庭にわより大戸おほいゆて正位せいゐ三社さん宮みや
使者しやト大呼おほい神使かみを見て事主ことぬし地上かみ平伏へいふく一神使かみを引ひてさるふ正殿せいだんハ座ざさ一む
行列ぎやうぎつハ家けの左右さゆうふりて隊たいをさるふさるふ神使かみハ烟かえり金かね茶ちや吸物あぶ膳部ぜんぶをさるふ一教けう献けん
をさるふさるふさるふ皆みなふ蓋かきをさるふ三方さん肴さかをさるふさるふ献酬けんじゆう七献しちけんをさるふ蓋かきさるふ
祝美いわみの小詣こぎをさるふ事終ことおひりて神使かみを他たハ新あらた婚いのり一家けのさるふ又また到いたり式しき前まへ
のさるふ一此こゝ神使かみハさるふ花水はなみづを賜たまふ事を神かみより女子おんなハ告つのりさるふの使しハ神使かみ社しゃ頭かみハ
さるふり御書ごしよの神使かみ社しゃ内うちハ飯いり一をさるふさるふ隨まりの行列ぎやうぎつを無なりさるふ一番いちばんハ傘かさ才さい錦にしん
のさるふひたをさるふ旋まわり端はたハ鈴すずをつけ又また裁はの物ものさるふさるふさるふ傘かさ才さいの上うへ
ハハ諫鼓かんこを飾かりさるふ持もの二ふた人にん紫むらちのめんハハ種たねをつてさるふさるふひささるふ
紅べに絞しぼのさるふ行ぎやう禪ぜん禪ぜんハハ鳴な音ね白しろまて一祭礼まつりごとハ用もちの傘かさ才さいとさるふ物ものハ古ふるハ
羽う原はら蓋かきの字じを訓とり所謂しよゐん織オリハハ神かみ典てん鳳ほう華かを覆おほひ奉ほうる一錦にしん蓋かきハ
とさるふ猶なほ説せつあり一ハ長ながけさるふ省しやうくさるふ二ふたハ假面かめんをさるふさるふ細こ女によハ扮は入いり
者もの一人ひとり幕まくらのさるふ紙かみハ女によ阴いんをさるふさるふをつけかてさるふ次つぎハ假面かめんハ
て猿田さる彦たハ扮は入いりもの一人ひとり麻あしハハ作りさるふ親帽おやぼうしハハの物ものを冠かむり手て持もちのさ
きを赤あかくさるふハ男おとこ根ねハ表示ひょうじをさるふさるふ三さんハハ法はふ服ふくを美びく一ハさるふ
山やま伏ふく螺らをさるふ四よハハ小兒せうじの警けい固こハハ身みをさるふさるふ隨まハ次つぎハ大人おとなの警けい
固こ麻あし上下かみ杖つゑを持もて非常ひやうじやうをさるふさるふ五ごハハ踊まわの者もの大勢おほい花はなヲをさるふ浴衣ゆかたハ正せい位ゐ
人ひと勢せいハハ色いろハハ細こ帯おビをさるふ一群ぐん行ぎやう里り言ごんハハをさるふさるふさるふさるふ降ふり降ふり
象ぞうハハ一皇孫みかど日向ひなたの高たか千せん穂ほの峯かみハ天降あまりハハハ象ぞうの心こゝろハハと嘆なげ

のさるふひたをさるふ旋まわり端はたハ鈴すずをつけ又また裁はの物ものさるふさるふさるふ傘かさ才さいの上うへ
ハハ諫鼓かんこを飾かりさるふ持もの二ふた人にん紫むらちのめんハハ種たねをつてさるふさるふひささるふ
紅べに絞しぼのさるふ行ぎやう禪ぜん禪ぜんハハ鳴な音ね白しろまて一祭礼まつりごとハ用もちの傘かさ才さいとさるふ物ものハ古ふるハ
羽う原はら蓋かきの字じを訓とり所謂しよゐん織オリハハ神かみ典てん鳳ほう華かを覆おほひ奉ほうる一錦にしん蓋かきハ
とさるふ猶なほ説せつあり一ハ長ながけさるふ省しやうくさるふ二ふたハ假面かめんをさるふさるふ細こ女によハ扮は入いり
者もの一人ひとり幕まくらのさるふ紙かみハ女によ阴いんをさるふさるふをつけかてさるふ次つぎハ假面かめんハ
て猿田さる彦たハ扮は入いりもの一人ひとり麻あしハハ作りさるふ親帽おやぼうしハハの物ものを冠かむり手て持もちのさ
きを赤あかくさるふハ男おとこ根ねハ表示ひょうじをさるふさるふ三さんハハ法はふ服ふくを美びく一ハさるふ
山やま伏ふく螺らをさるふ四よハハ小兒せうじの警けい固こハハ身みをさるふさるふ隨まハ次つぎハ大人おとなの警けい
固こ麻あし上下かみ杖つゑを持もて非常ひやうじやうをさるふさるふ五ごハハ踊まわの者もの大勢おほい花はなヲをさるふ浴衣ゆかたハ正せい位ゐ
人ひと勢せいハハ色いろハハ細こ帯おビをさるふ一群ぐん行ぎやう里り言ごんハハをさるふさるふさるふさるふ降ふり降ふり
象ぞうハハ一皇孫みかど日向ひなたの高たか千せん穂ほの峯かみハ天降あまりハハハ象ぞうの心こゝろハハと嘆なげ

花水祝浴水畧圖



堀の内驛花水祝の
噪劇の図原本の
草画を此小載て

別小至細の圖を

示さるものい

梓刺の勞と

皆在り

梅まきと喜むと

この布や巻も

水を祝ひ

堀の内を

山東廣島

鈴木牧之

の談柄小具するの

○菱山の奇事

越後の頸城郡松の山一庄の終名ゆて許多の村落を併合する大庄なりと
 も山間の村落ゆて一村の内なりと平地なりと松代との野の平地
 て農家軒を連ぬ外百番の諸ふえなり松山鏡との地とのうら
 鏡が池の古跡まであり今も池ありぬ埋てその跡の
 きり接ふ松山かとのうら鏡破の繪巻との原とて作らる
 ん此も平谷も右の松の山の事果てり松の山の庄内も菱山とのあり
 山の形三角なるゆゑの名も平山なりぬ松の山は須川村川
 りあり此ひ山毎年二月入り夜中ふらりて雪積りの其ひ
 聞も傳へり由髪白衣の老翁等をもり下りたるなり此
 らは須川村の方二十町余の地真直小突下も平山畫作と
 高浦村の方

斜ふては平山作其驗少も違事なり年の豊凶雪積り係る幸此山小
 の限るも一奇事なり

固ふり余が旧友寺治小住丸山氏の家祖父の博学の聞えあり入り
 余二十年前丸山氏の家小遊物をとり一時祖父が空曆の頃の著述とて越
 後名寄との書をとりて三百卷自筆の寫本と名寄との書を越後
 の風土記なり一國の神社佛閣名所旧跡山川地理人物國産藥品の類も
 部を分圖をとりて通曉しやまるとる精撰と此書も右菱山の説も租屋
 どよのりて引を菱山のりて此書の事をおひりて
 大成の書も空秘笈ありて世に傳へるが惜けり

○秋山の古風

信濃と越後の国境も秋山とのあり大秋山村との根えとて十平ヶ村を
 らる秋山とて秋山の中央も中津川とのありて

西の十五丁村の東の方ふ在る村ハ
●中越後守の村
●清水川原村
●人家三軒あり

●三倉村三軒
●中の平村二軒
●大赤澤村九軒
●天瀬村二軒
●小赤澤村八軒
●上の原村三軒

●和山軒西の村
●下結東村
●逆巻村軒
●上結東村九軒
●前倉村軒
●天秋山村

人家八軒あり此地根元の村より相傳の武置を
持し其の地ありて天明卯年の凶年より代
りて今より久しき種を以て二村の地を
餓死して今草原の地となりて

▲屋敷村十九軒
▲湯本あり温泉此地東の山田場山天の
嶺を以て連岳と云ふ西の赤

倉の高嶺雲を凌いで衆山と云ふ
清水川原の越後の入り口湯本の信濃
越後の

嶮路の二夫是を守る万平も越え難き山
間幽避の地と里俗の傳ハ此地ハ

大むり平家の人の隠る所といひ
牧三謂り鎮守府將軍平の惟茂四代
の后

流奥山太郎の孫城の鬼九郎資國と
婿男城の太郎資長の代まで越後高田の辺

鳥坂山の城を構へ一國の威を震ひ
謀叛の聞えありて鎌倉の討手佐木

三郎兵衛入道西合と云ふ戦ひ
終つて落城せり此時貴族の落人
と云ふ

秋山の隱りし里俗の傳ハ平氏との
争ひありて秋山

史古の風俗の傳ハ
殘りの一聞ハ一度の尋ね
と云ふ

よりありし業内者を得りし
ゆゑ偶然ありし業内者
教ふ事と云ふ

噌齋油鯉節茶燭燭を
用意して徒者ありし
と云ふ

十一年九月八日の事あり
たその月秋山は述き見玉村
の不動院に宿次の日

桃源を尋ねる心地と
秋山ありし清水川原
のありて

ふいふんとする道の傍
ふ丸木の柱を建注連を
引りて中央高札ありし

ある事ぞと云ふり
小童のうらやまの
は文字也

こののりし事ト
あるなり業内曰秋山
の人の死をいふ事

死をいふ事如し
いふ事と云ふり
我子といふ事

家小舟とせし山
の假小屋を作りて
入るる食物をよび
やと云ふ事

錢ありし里より
山伏をよび新ら
せり九人ありて
十人の死を

と云ふ事秋山の
人他野の事と云ふ
り何事の用を
と云ふ事

を新ふせのまをたぐつて例の細道をたつた高木のやの低木下りよりの途
 をへくやうやく三倉村のりつてつてゆへに人家三軒あり今朝見玉村より用意一
 舟書をひらなやとあるのりつてゆへに老女よりつてゆへに木の盤の上の長
 き草をまき木掃のやうなものをゆへに撥入解分つてゆへにのりつてゆへに
 と向ふ山ありゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへに
 名のゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへに
 衣のゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへに
 かつゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへに
 塩澤より秋山をゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへに
 老女のゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへに
 かつゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへに
 て喰つてゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへに

縛りつけ管をゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへに
 木をゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへに
 りゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへに
 のゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへに
 納戸も戸棚もゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへに
 さゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへに
 木鉢の大きゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへに
 秋山の人家まゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへに
 栗棹をゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへに
 りゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへに
 ゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへに
 まゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへに

足を灰のうへへ入珍めづりてくくを喰くふく柱しらの中ちゆうもきき木きを惜おし気けままく
 焼やくく火か影かげ小こ照ていままををままばば末まののももままのの色いろ黒くろくく肥こ太とりり魂たまををりり襦じゆををま
 ぐりああげげてて虫むしををひひくく又またぐぐけけとと取とららふふまませせばば二に人にんのの姉あねのの色いろ白しろくくてて玉たまは
 双ふたなるなる美み人にん之の菓子かしをを喰くるる類るい又またあありりてて町まち多たなるなる面おもてにに愛あ形かたちののわわををま
 へかかるる一ひと双ふたのの玉たまをを秋あき山やまのの田でん夫ぶとと妻つまふふせんんのの可あは憐れ琴ことをを新あらたととてて籠かごをを煮にくく平へい主人しゅじんの
 里さと地ぢのの事ことををままりり知しりりてて話わもも分わかるる袋ふくろのの多た所ところのの風かぜ俗ぞくををままりり移うつすすのの物もののの誇こほりりり
 あありりままりりををままりり記しをを○○此こゝ地ぢ近ちか年ねん公こう税ぜいをを聞きふふののままもも米こめ麥あわをを生なせせぶぶるるゆゆも
 僅わずかのの貢こうををままりり○○此こゝ地ぢ近ちか年ねん公こう税ぜいをを聞きふふののままもも米こめ麥あわをを生なせせぶぶるるゆゆも
 ををままりり定さだめめるるままもも冬ふゆのの雪ゆき二に丈じゆ餘よももつつのの人にんののままもも○○此こゝ地ぢ近ちか年ねん公こう税ぜいをを聞きふふののままもも米こめ麥あわをを生なせせぶぶるるゆゆも
 送おくるるゆゆももままりり○○此こゝ地ぢ近ちか年ねん公こう税ぜいをを聞きふふののままもも米こめ麥あわをを生なせせぶぶるるゆゆも
 一ひと黒くろ駒こま太と子ことと称なづかかるる画え軸じよくあありりててままをを借かりりてて死し人にんのの上うへをを三さん三さん三さんととままりり○○此こゝ地ぢ近ちか年ねん公こう税ぜいをを聞きふふののままもも米こめ麥あわをを生なせせぶぶるるゆゆも
 ととてて私わたくし小こ菴そうのの寺てらををままりり○○此こゝ地ぢ近ちか年ねん公こう税ぜいをを聞きふふののままもも米こめ麥あわをを生なせせぶぶるるゆゆも

氏うぢののままりり右みぎのの助すけ三さん郎らう山やま田でんのの徳とく本ほん家け太た子このの画え像ざうととりり太た子こののままりり○○此こゝ地ぢ近ちか年ねん公こう税ぜいをを聞きふふののままもも米こめ麥あわをを生なせせぶぶるるゆゆも
 月つきののややををままりり○○此こゝ地ぢ近ちか年ねん公こう税ぜいをを聞きふふののままもも米こめ麥あわをを生なせせぶぶるるゆゆも
 乾か菜さいののままりり○○此こゝ地ぢ近ちか年ねん公こう税ぜいをを聞きふふののままもも米こめ麥あわをを生なせせぶぶるるゆゆも
 他た所ところのの婦ふ人にん他た所ところのの男おとこををりりてて親おやぢ族しやく不ふ通つうてて再また面めん會かいせせぶぶるるゆゆも
 一ひとのの習ならひ○○秋あき山やま中ちゆう小せう寺てら院いんののままりり○○此こゝ地ぢ近ちか年ねん公こう税ぜいをを聞きふふののままもも米こめ麥あわをを生なせせぶぶるるゆゆも
 一ひとのの無む筆ひつとといいふふ○○此こゝ地ぢ近ちか年ねん公こう税ぜいをを聞きふふののままもも米こめ麥あわをを生なせせぶぶるるゆゆも
 一ひとのの物もの識しとといいふふ○○此こゝ地ぢ近ちか年ねん公こう税ぜいをを聞きふふののままもも米こめ麥あわをを生なせせぶぶるるゆゆも
 一ひとのの木き綿わたをを生なせせぶぶるる○○此こゝ地ぢ近ちか年ねん公こう税ぜいをを聞きふふののままもも米こめ麥あわをを生なせせぶぶるるゆゆも
 一ひとのの草くさのの皮かわをを製せいしてして麻あし小せう替かへへ用もちををままりり○○此こゝ地ぢ近ちか年ねん公こう税ぜいをを聞きふふののままもも米こめ麥あわをを生なせせぶぶるるゆゆも
 一ひとのの形かたちををままりり○○此こゝ地ぢ近ちか年ねん公こう税ぜいをを聞きふふののままもも米こめ麥あわをを生なせせぶぶるるゆゆも
 一ひとのの本ほん草くさのの名な麻あしのの字あざ小せう替かへへ用もちををままりり○○此こゝ地ぢ近ちか年ねん公こう税ぜいをを聞きふふののままもも米こめ麥あわをを生なせせぶぶるるゆゆも
 一ひとのの毒どく草くさののままりり○○此こゝ地ぢ近ちか年ねん公こう税ぜいをを聞きふふののままもも米こめ麥あわをを生なせせぶぶるるゆゆも

秋山絶壁の圖



同猿飛橋の圖



牧之圖

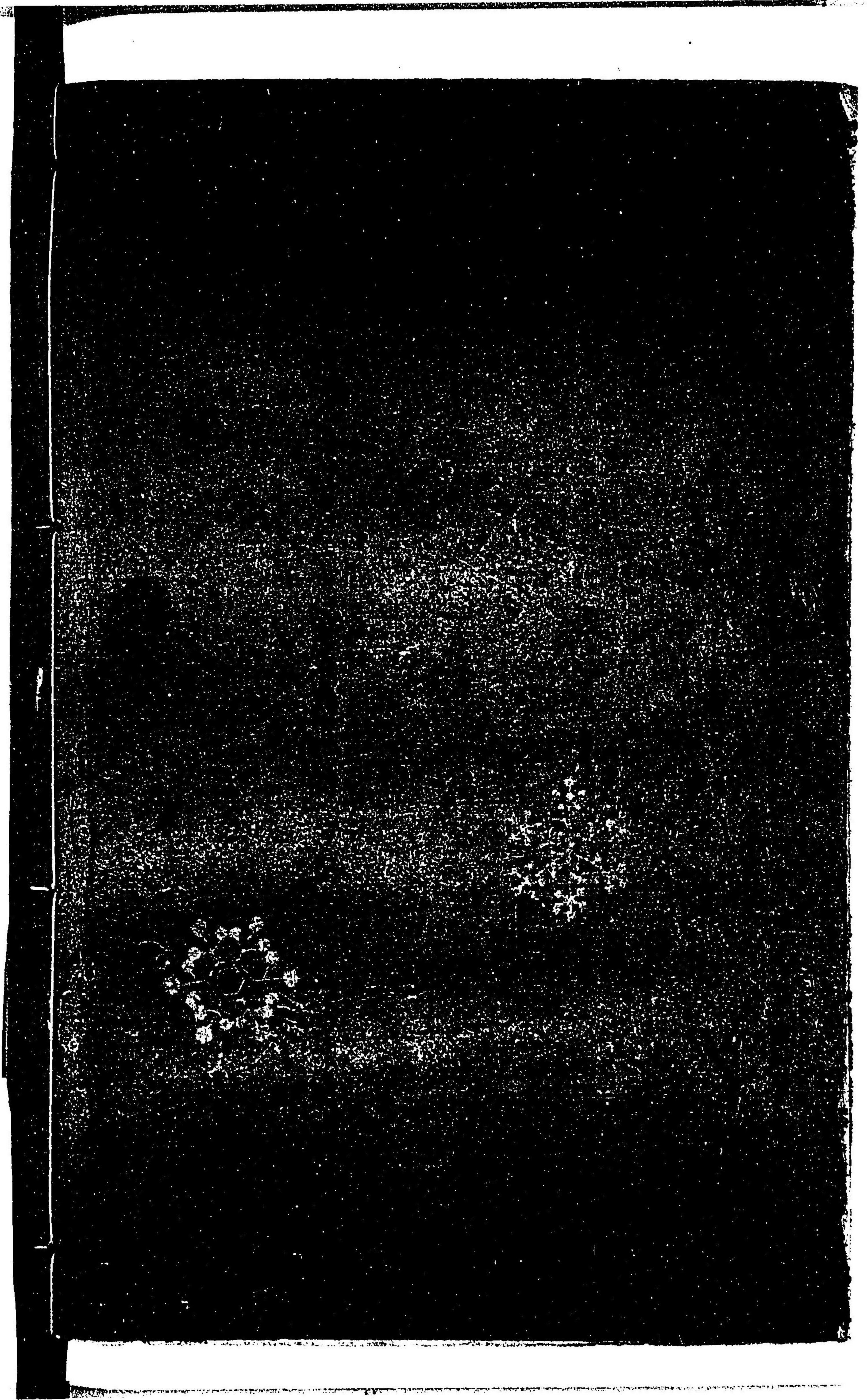
界小入りの森の圖



京水筆

雪の圖





139
7
146

東 京 圖 書 館				
七 冊	一 四 六 號	一 架	二 九 函	地 理 類 和 書 門